

京都大学	博士（文学）	氏名	中山 慧輝
論文題目	『瑜伽師地論』における無常説の研究		
（論文内容の要旨） 本論文は、序論と四章の本文と附録からなり、これまで瑜伽行派の無常説研究において主として研究対象となっていた『瑜伽師地論』以降の無常説の発展や展開を追うための基盤構築も視野に、「声聞地」と「菩薩地」を軸に『瑜伽師地論』における無常説の内容およびその展開を明らかにすることを目的としたものである。附録には、本論文と直接関係する「菩薩地」「菩提分品」の校訂テキストと和訳注が付され、さらに、『瑜伽師地論』以降の瑜伽行派の文献に説かれる無常説が附論としてまとめられる。 序論では、先行研究を概観した上で問題点を整理し、それをふまえて、本論文の課題と目的を設定し、それを解決するための本論の構成を示す。 第1章では、本論文の議論の前提を整えるために、まず『瑜伽師地論』の構成を確認する。第1節では、同論全体の構成を概観し、著者問題や編纂問題、新古層に関する先行研究の見解を整理する。第2節では、概して古層と新層に区分することのできる「本地分」と「摂決摂分」の対応関係を確認する。第3節では、最古層「声聞地」の構成と概要を確認し、無常説に関連する文脈を整理する。第4節では、本論文のもう一つの土台となる最古層「菩薩地」の構成と概要を確認し、無常説に関連する文脈を整理する。第5節では、「本地分」と「摂決摂分」以外に注目し、「摂積分」「摂異門分」「摂事分」の構成と概要を確認する。その結果、現時点では『瑜伽師地論』の著者問題や編纂問題は完全に解決されていないが、同論内に発展や展開が見られることから、先行研究に従って「声聞地」と「菩薩地」を最古層に、その他の「本地分」と「摂事分」「摂異門分」を古層に、「摂決摂分」を新層に暫定的に位置づけ、それを本研究の議論の前提とする。 第2章では、「声聞地」系統の無常説を考察する。第1節に「声聞地」に先行すると想定される禅経、初期の説一切有部論書、譬喩師／経量部、アシュヴァゴーシャ作品、阿含經典の五つについて、先行研究の見解をまとめつつ考察する。「声聞地」の実践や教義については、全体として説一切有部の教義体系の影響を最も受け、多かれ少なかれ禅經典と関わりを持ちつつ、分別論師や譬喩師／経量部とも思想を共有するが、根幹では阿含經典に依拠しているとする。瑜伽行派は「根本説一切有部律」を伝持する説一切有部から派生した集団であるため、その經典群は「根本説一切有部律」などに見られる説一切有部系のものであると先行研究は推測する。このように、「声聞地」を検討するうえで阿含經典からの影響という側面が特に重要であるとする。 第2節では、阿含經典の解説を中心とする「摂異門分」や「摂事分」を用いて、『瑜伽師地論』が阿含經典をどのように受容、解釈したかに着目しながら、阿含經典に由来する『瑜伽師地論』の無常説を整理し、その特徴を明らかにする。論者は、特に重要な点として、次の二点を指摘する。一点目は、無常が生と滅の二側面を有することであり、二点目は、輪廻において生死（生滅）を繰り返しているという生涯毎の無常、瞬間毎に生滅を繰り返しているという刹那滅の無常の二つの無常を最も基本的な枠組みとすることである。一点目は、生と滅のそれぞれが断見と常見を取り除くこと、また、無常な諸行には我や衆生という別の事物は存在しないが、生滅する諸行は存在するという、増益と損減を排除する二種の中道を含意する。特に後者は、『瑜伽師地論』の『小空経』や『勝義空性経』に基づく空理解を反映したもので、現在瞬間に生じた単なる諸行（saṃskāra-mātra）だけが存在していると説明し、説一切有部の三世実有説に対抗する現在有体、過未無体説の立場を表明しつつ、瞬間的な生滅の無常			

説を説くとする。二点目について論者は、『泡沫経』などの解釈を通じて、生涯の連続 (janma-paramparā) と瞬間の連続 (kṣaṇa-paramparā) という語を用いて二つの無常説が導入されることを指摘している。この二つの無常説の修道論的な役割の一つは、それぞれが誕生などの七苦と、三受すべてが苦しみであるという二種の苦しみと結びつくことであり、『雑阿含経』第9,467経などを通じて説明されると言う。

第3節では、「声聞地」の中でも中心となる「第四瑜伽处」に説かれる世間道と出世間道を扱い、世間道と出世間道において無常説に違いがあることを明らかにしつつ、経典との関わりや修行道の流れにも留意して、世間道と出世間道の無常説を詳細に分析する。「声聞地」の無常説は、世間道において欲望から離脱するために部分的にしか機能しない一方、出世間道においては涅槃に導く四諦観察の起点となり、苦品のなかでも苦しみ、空、無我の理解に大きく貢献する重要な概念であると指摘する。そして、いずれの場合も、阿含経典の記述や準備段階の内容を応用しており、特に阿含経典との関係は第1節より強調してきた点であることも確認している。

第4節では、特に「声聞地」出世間道の無常説に注目し、新層「摂決択分」において「声聞地」に見られる無常説がどのように展開したかを検討する。「五識身相応地意地決択」は玄奘訳やチベット語訳では五つの無常性に生起という無常性を追加して六つとするが、「声聞地」と同じ五つの理解を示す真諦訳が原典に近いことを指摘する他、「五識身相応地意地決択」は、身表業と刹那滅論証の文脈で「声聞地」や「摂事分」の所説を応用、発展させていることも指摘する。さらに、諸行の来世への生起については、「本地分」「有尋有伺等三地」が仏教外の異論である世界創造神としての主宰神の存在を否定するが、その論証の一段が「声聞地」とほぼ同じであることも指摘している。

第3章では、「菩薩地」系統の無常説を考察する。基本的に第2章と同様の手順にそって、声聞乗的な無常説と新たに加わる大乘的な無常説の二つに応じて節を区分した上で議論する。第1節では、大乘の観点から解釈される非存在という意味の無常説を扱う。第1項では、「菩薩地」に先行すると考えられる大乘経典のうち、先行研究にも指摘される『無尽意経』に加え、「般若経」に説かれる無常説を取り上げる。

『無尽意経』が無常を非存在 (*asat) と無執着 (*asaṅga) と解し、消失 (*avināśa) という従来の意味を否定すること、また、同様の傾向が「般若経」にもあり、『道行般若経』などの初期の旧『八千頌般若経』系統が無常波羅蜜を消失しない (*avināśitva) の意味で理解し、中期『大般若波羅蜜多』「第五会」「第四会」(玄奘訳)になると、常に存在しない(常無性)の意味で理解するようになることを指摘する。後期「般若経」はそれを無為 (asamskṛta) の意味で説明するが、それに対する注釈書は非存在の意味で解釈するようになることを指摘し、「菩薩地」の非存在としての無常解釈が『無尽意経』や「般若経」の一部に遡ることができ、「般若経」のほとんどの系統においてもその解釈が生じる土壌が整っていたことを明らかにする。

第2項では、最古層「菩薩地」の非存在としての無常説を概説し、菩薩の無常観察という実践における非存在と生滅の二つの無常説の関係について考察する。「本地分」「菩薩地」が、先行する「般若経」などの大乘経典に見られる空無自性を事物 (vastu) の概念によって解釈し、事物には言語表現される本質は存在しないけれども、言語表現され得ない本質(離言自性)は存在すると、増益と損減の両方を離れた中道的理解を示し、そして、それらの解釈と無常を会通するために、諸行には言語表現される本質が常に存在しない(nitya-kālaṃ nāsti)と理解して、無常に非存在の意味を与えたことを確認する。さらに、「菩薩地」が瞬間的生滅としての無常も伝え、それを非存在としての無常理解の準備段階に位置づけていることを指摘し、その証拠として、「菩薩地」が大乘と声聞乗の真理観である法無我と人無我を同じ『小空経』に基づく増益と損減を排除する中道的立場から説き、ともに事物の概念の下に設定することが確認され、さらに二つの無常説がそれぞれの無我説に通ずるものであることを示

す。第3項では、新層「摂決択分」が「菩薩地」の二つの無常説をどのように受容し、解釈したかを明らかにし、「摂決択分」への展開を跡付ける。特に「菩薩地決択」に注目し、五蘊無常という伝統説を解釈するにあたって、『解深密経』「無自性相品」の所説を承けて「菩薩地」の非存在としての無常が三無自性説（特に相無自性性）を通して受容され、遍計所執性が常に存在しない、という意味で理解されることを明らかにする。また、『解深密経』が無自性空の教えを恐れず受け入れるための準備的修行として生滅の無常観察に言及し、それを生無自性（依他起性）と関連付けて説くことから、非存在としての無常がその後のより高次の段階において観察されるものであると推測されるとし、両者が「摂決択分」において事物ではなく三無自性説（あるいは三性説）の枠組みに組み込まれ、「菩薩地」と同様に、一連の修行道の流れのなかで順に説かれることを明らかにする。

続く第3章第2節では、声聞乗の観点から解釈される生滅という意味の無常説を扱う。第1項では、「菩薩地」の生滅としての無常説について、文脈を追ってその内容を整理する。「菩薩地」は、現在有体過未無体の立場から三世という大きな時間幅における諸行の連続を観察し、それを前提として有為の四相を用いた無常（刹那滅）を観察する。そこでは、瞬間単位に設定された有為の四相の実体性が論理的観察によって排斥され、単なる諸行が生滅しているだけで四相は諸行の状態を表すにすぎないことが強調されることを指摘する。このように、四相観察の前提としての三世の観察、瞬間単位での四相の観察、四相の実体性否定という無常観察の要点を明らかにする。第2項では、古層「本地分」「意地」を扱い、異なる文脈で「菩薩地」と同様の見解が見られることを「四相」の考察を通じて指摘する。「意地」が認識の相続の説明をする際、「菩薩地」の無常観察の流れと同様に、三世の設定を行った後に、瞬間単位での四相を定義する点、また、四相の定義に加えて、瞬間単位に設定される四相を実体としてではなく諸行の状態とみなす点も、「菩薩地」と共通していることを指摘する。このように、「意地」では「菩薩地」に説かれる無常観察の要点が、認識の相続という「菩薩地」とは異なる文脈に見出されることを明らかにする。第3項では、新層「摂決択分」における「菩薩地」「意地」と続く無常説が「声聞地」系統の無常説と結びつき、『瑜伽師地論』の無常説が統合、整理されることを明らかにする。「五識身相応地意地決択」が「意地」の示した四相の実体性否定の議論の中で「菩薩地」の所説を加えることや、三世の設定につながる現在有体過未無体の立場に基づいて三世実有説批判を導入し、三世に関する自派の立場を明言することによって、四相の実体性否定を強化したことを指摘する。その後、「意地」の理解に基づいて四相を定義し、四相を新たに多種に分類するが、そこに生滅としての無常の展開があることを明らかにする。つまり、生住異の三相が、衆生の存在（ex. 五蘊の誕生、存続、老化）や心的要素（ex. 安楽の生起、存続、苦への変化）、そして「菩薩地」以来の瞬間単位、という大きく分けて三つの観点から種々に定義され、第四相に「声聞地」に説かれた五つの無常性が配されることを指摘する。その分類の枠組みは、生涯の連続による無常性と、瞬間の連続による無常性の二点を軸に理解することができ、生住異に見られる衆生の存在や心的要素に関わる項目が前者の範囲で細分化したものであり、瞬間単位での四相はそのまま後者を指すという。後者に関しては、刹那滅を含意する「声聞地」の(2)消失を(1)変異と順番を入れ替えて先頭に置く点に、瞬間単位での他の三相との対応を明確化する意図が見られることを指摘する。このようにして、有為の四相において「声聞地」系統の無常説と「菩薩地」系統の無常説が統合されることを明らかにする。

第4章では、第2章第1節に指摘された「声聞地」における阿含經典の重要性を改めて指摘する。第1節では、『瑜伽師地論』全体における阿含經典の使用について先行研究を整理し、第2節では、「第一瑜伽処」の「種姓地」に説かれる涅槃に至るまでの修行道の構成と「出離地」に説かれる世間あるいは出世間道に進むまでに身に付け

るべき修行項目を取り上げて、それらの各項目がすべて經典および律に見られることを明らかにする。「種姓地」はすべての条件項目が阿含經典に基づいており、「根本説一切有部律」に見られる『沙門果經』や漢訳『雜阿含經』など様々な阿含經典の要素を集成して、出家以前から涅槃までの一連の過程を構造化したものであることを指摘し、經典使用という点で注目すべきは、各項目の説明部分もほとんどが經文を引用したかの如くにそのまま用いて書かれていることであると言う。また、經文はパーリ聖典よりも説一切有部系の經典と合致する事例が多いことも示される。一方、「出離地」は分量が多いため、解説部分における經典典拠の特定は部分的な調査にとどまっているが、項目については「種姓地」と同様に、すべて典拠を經典と律に特定し、解説部分も經典の文言をそのまま用いる場合が多く見られることを指摘している。「出離地」では、項目の典拠元とは別の經典の文言で解説部分を説明するという經典の二重構造を一つの特徴として挙げることができる。以上の考察を通じて、涅槃に至るまでの修行段階や出離に資する修行者のあり方をブッダやその弟子たちが伝えてきた言葉に求め、それらに基づいて修行道を再構築しようとする「声聞地」の姿勢が明らかにされる。

序論の中で先行研究をふまえて設定された課題は本論中に適宜検討されているが、結論にも再度まとめられ、(1)「菩薩地」の無常説の異質性、(2)三性説と無常説の関係、(3)刹那無常と相続無常の解釈について、論者は本論文をふまえた回答を改めて提示している。その上で、『瑜伽師地論』における無常説の展開をまとめ、『瑜伽師地論』以降の無常説の展開を検討するための基盤も整ったとし、論を結んでいる。

(論文審査の結果の要旨)

「無常」は、仏教の基本的な教説として広く知られる。無常説は初期經典にも現れるが、時代が下がり刹那を厳密に考える立場になると、瞬間毎に生滅する「刹那滅」と理解されるようになり、その論証が試みられた。それは「刹那滅論証」と呼ばれ、そのインド仏教思想史上の展開はこれまでも研究者の興味を惹いてきた。さらに、大乘仏教では通常の生滅の意味を超越した無常として「非存在」の意味の無常が説かれるようになる。大乘仏教の一派である瑜伽行派の諸論書には、生滅の意味の無常に加え、非存在の意味の無常も説かれる。この両者を含む無常説は実践とも関連し重要であるが、その無常説を瑜伽行派の教説の中でどのように位置付けるかには課題も残されていた。本論文は、無常説を説く瑜伽行派の諸論書の中でも特に瑜伽行派の基本典籍である『瑜伽師地論』に注目し、その後の瑜伽行派の無常説研究に繋がる研究基盤を構築することも視野に入れ、先行する初期經典や大乘經典にも注意を払いながら、新古の層も存在する膨大な『瑜伽師地論』に伝わる重層的な無常説を解明しようとした意欲的な労作である。

本論文は、序論と四章の本論と附録からなる。附録には、本論文と直接関係する「菩薩地」「菩提分品」の校訂テキストと訳注が付され、さらに、『瑜伽師地論』以降の瑜伽行派の諸論書に説かれる無常説がまとめられる。

序論には先行研究を整理した上で課題と目的が設定され、それを解決するための本論の構成が示される。本論第1章では『瑜伽師地論』の構成を概観した上で、新古の層の区別を含め、基本的な情報が整理される。『瑜伽師地論』は「本地分」「摂決択分」「摂釈分」「摂異門分」「摂事分」の五部から成り、さらに「本地分」は『瑜伽師地論』の中でも特に重要な「声聞地」と「菩薩地」を含む十七の地から構成される。論者は先行研究を網羅的に検討し、「声聞地」「菩薩地」を最古層に、「声聞地」「菩薩地」以外の「本地分」と「摂事分」「摂異門分」を古層に、「摂決択分」を新層に位置付け、それを前提に論を進める。第2章ではまず「声聞地」系統の無常説が取り上げられる。先行する文献として特に阿含經典の重要性を指摘した上で、「摂異門分」や「摂事分」を用いて阿含經典に由来する無常説を検討する。さらに「声聞地」の世間道と出世間道に説かれる性格の異なる無常説をそれぞれ詳細に分析している。第3章では、「菩薩地」系統の無常説が考察される。「菩薩地」には、大乘特有の非存在という意味の無常説と声聞乗とも共通する生滅という意味の無常説が見られるが、そのうち、まず大乘特有の無常説について、「菩薩地」に先行する大乘經典に現れる非存在という無常の解釈を整理する。その上で「菩薩地」の非存在としての無常説を概説し、菩薩の無常観察という実践における非存在と生滅という二つの無常説の関係について考察を加え、さらに「摂決択分」がその「菩薩地」の二つの無常説をどのように受容し解釈したかが明らかにされる。次に「菩薩地」に見られる生滅という意味の無常が取り上げられ、その内容が整理される。そして、「本地分」中の「意地」にも別な文脈で「菩薩地」と同様の解釈が見られることを指摘し、最後に、「菩薩地」「意地」と続く無常説が「摂決択分」の中で「声聞地」系統の無常説と結びつき、『瑜伽師地論』の無常説が整理、統合されることを指摘する。第4章は第2章の附論的な位置付けに当たり、阿含

経典との関係を明確にすることが「声聞地」研究にとって重要課題であることを示す傍証として、「声聞地」「第一瑜伽处」を例に取り上げ、その内容が広く経典や律に依拠していることを指摘している。このように論者は、膨大な『瑜伽師地論』に対して、細心の注意を払って新古の層を区別し、それぞれを慎重かつ詳細に分析する。その結果、『瑜伽師地論』の重層的な無常説の展開を明快に描き出すことに成功しており、それが本論文の最大の功績である。

加えて、本論文には特筆すべき点が四つある。第一に、論者が論文全体にわたってテキストを慎重に検討し、精密な理解を提示していることである。本論文で扱われた文献は『瑜伽師地論』だけではなく、関連する経典や論書は多岐にわたるが、そのいずれに対しても同様に丁寧に対処していることが、それを前提とする議論に信頼性をもたらしている。第二に、広範な議論の中で、関連する多数の研究を取り上げた上で、常に先行する無常説との関係も念頭に検討していることである。その精緻な議論もまた、論者の提示する結論に説得力を与える一つの重要な要素となっている。第三に、本論文に直接取り上げられたのは『瑜伽師地論』であり、そこに説かれる無常説の解明自体がそれ以降の瑜伽行派の無常説研究の基盤となり得るが、それに止まらず、論者が附録に『瑜伽師地論』以降の瑜伽行派の諸論書に出る無常説をまとめていることも特筆に値する。その附録も含め、『瑜伽師地論』以降の瑜伽行派の無常説を研究するための基盤は、この論文によって十分に整備されたと言ってよい。第四に、先行研究をふまえて設定された課題に対し、論者が『瑜伽師地論』における無常説を解明する中で十分に回答を与えたことである。これも今後の研究の基盤整備の一環として評価できる。ただし、それらの課題は『瑜伽師地論』以降の無常説にも関わるため、今後広く瑜伽行派の諸論書に見られる無常説の研究が進む中で、論者の回答も検討されることになるはずである。

本論文は、このように優れた点が挙げられるが、全く問題がないわけではない。提示された校訂テキストと和訳に致命的な問題はないものの、訂正の必要な箇所は存在し、なお改善の余地は残る。また、満遍なく多数の先行研究を取り上げつつ進められる詳細な研究は、論者の主張が見えにくくなる傾向があり、論述の進め方にも改善できる点があったことは否めない。しかし、そういった問題も今後の論者の研鑽によって改善されることが充分期待でき、また、その成果を考えれば、本論文の価値自体を大きく損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、令和7年8月22日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。